

ゲオルク ヴェールト=ハインリヒ ハイネ 往復書簡と「ロマンツェーロ」

中 野 和 朗

ゲオルク ヴェールト (1822~1856) とハインリヒ ハイネ (1797~1856) は、ともに全ヨーロッパが、封建社会から近代ブルジョア社会へと大きく転換する激動の時代に生きて、ペンを武器としてよりよき時代のため、人間解放を希ってたたかき闘った詩人である。共通の友であったエンゲルスは、ヴェールトを「ドイツ・プロレタリアートの最初で最も重要な詩人」¹⁾と評価し、ハイネを「今日生きているすべてのドイツ詩人のうちで最も傑出した詩人」²⁾と賛えている。

両詩人を結び合わせたのは、やはり共通の友であったマルクスであった³⁾。1849年8月の初め、ヴェールトはマルクスに連れられて、すでに「しとねの墓場」で呻吟していたハイネをセーヌ河畔に訪ねた。しかしその日は不運にもハイネの病状が悪化して両詩人が顔を合わせるには至らずに終わった。それから2年経った1851年の1月の終りから2月の初めにかけての頃、前年の7月18日に始まったイギリス、ポルトガル、スペイン旅行の帰路、ヴェールトはパリに立ちよりハイネを再度訪ねた。その時両詩人ははじめて会見できたのであった⁴⁾。

両詩人の親交はこの時から始まったが、残念なことに、それからわずか5年の後(1856年)に二人は相い次いでこの世を去ってしまった。

今日残されている両詩人の書簡は、ヴェールトからハイネ宛のもの9通、ハイネからヴェールト宛のもの1通のみである。それらは年代順に列記すると次のとおりである。

- (1) 1851年2月21日ハンブルク、ハイネ宛
- (2) 1851年4月12日ハンブルク、ハイネ宛
- (3) 1851年6月10日ハンブルク、ハイネ宛
- (4) 1851年10月4日ハンブルク、ハイネ宛
- (5) 1851年11月5日パリ、ヴェールト宛
- (6) 1851年11月17日ブラドフォード、ハイネ宛
- (7) 1852年5月14日ライプツィヒ、ハイネ宛
- (8) 1855年4月1日ブエノスアイレス、ハイネ宛
- (9) 1855年11月2日マンチェスター、ハイネ宛

これらの往復書簡は、ハイネ研究やヴェールト研究にさまざまな興味深いものを提供しているが、さらには、「完全に崩壊するのを待つばかりの唯心論的骸骨」⁵⁾となり、「安らぎのない墓」「褥の墓場」で、「死んでしまえば金を支払ったり、手紙や、まして書物など書いたりしなくていい、そのような特典も与えられぬ死」⁶⁾に苦しめられている一個の人間と、かれへの尊敬と愛から、励ましと慰めを与えつづける青年との温かい魂の交感の記録ともなっている。

ところで、上記書簡群のうち、1851年内に書かれた(1)から(6)には、ひとつの事がらが一貫していることを指摘できる。それは、「歌の本」「新詩集」とならんで三大抒情詩集を形づくっているハイネ最大の詩集「ロマンツェーロ」の出版にかかわる事情である。

本稿では、以上の書簡があきらかにしている「ロマンツェーロ」誕生にいたるまでの、隠れた事情、ヴェールトのいわば産婆役のような友情溢れる陰の尽力、「ロマンツェーロ」にたいするヴェールトの所感などを紹介しながら、両詩人の交友の一端をあきらかにしたい。

ハイネの詩を一手に引き受けて出版していたのは、すでによく知られているとおり、ハンブルクの「ホフマン ウント カンベ社」であったが、ヴェールトの存命中出版された唯一の小説「有名なる騎士シュナプハンスキーの生涯と所業」もここから出された⁸⁾。

1849年1月ハンブルクに移ったヴェールトは、同年1月30日母親に「ハイネ、ベルネ等の老出版家、カンベとすでに何回も会って話しをしました。そしてぼくは再びいろんなことを識り、学んでいます。』⁹⁾と書き送っている。

こうしてヴェールトは、カンベと親交を結ぶことになった。

1851年の初頭にハイネをパリに訪ねてハンブルクに戻ったヴェールトは、書簡(1)で、「あなたが関心を持っておいでのカンベ氏と、私は派手に口論しました。かれはあなたに随分長い間無沙汰していることを内心ではたいへん申し訳ないと思っているように私には思われま。私に対してかれは、そのことを勿論みずから吐露しようとはしません。しかしかれは、次の見本市の直後、即ちこの春にはあなたを訪ねることを固く決心しました。』¹⁰⁾と、ハイネに書き送った。

ここに記されているヴェールトとカンベの口論は、すでに前年(1850)の秋にハイネがカンベに伝えた新しい詩集の出版の件も含めて、カンベがハイネに何の便りもしないことをヴェールトが吐責したことに因るものと推察される。

書簡(1)に述べられている見本市の直後、ハイネを訪ねるというカンベの決意は、春になっても一向実行される気配もなく、ヴェールトは書簡(2)で再度次のようにハイネに書いた。「カンベはいまなお断乎として近々あなたを訪ねると誓っています。しかしそれを本当にするものは誰もいません。私にはこれが理解できません。病気の古い友人を訪ねることが肝要だという時に、どうして嘘しかつけず、嘘をつかねばならないのか、私には理解できないのです。ですから私は、願わくばかれがやろうと決めたことをこれからでも実行してくれたらと思います。いずれにせよかれがこんなに長い間あなたに便りをしないでいることは許しがたいことです。そこで私は、このことをもっとほかの幾つかのことも併せて、くりかえしかれを非難しました。』¹¹⁾

しかしこれほどヴェールトがやいのやいの云っても何故かカンベは、ハイネを訪ねるどころか、一通の手紙すら出さないでいるうちに春は過ぎ去ってしまった。そこでヴェールトは、遂に次の手段を講ずることになるが、それについては書簡(3)が伝えている。

その書き出しの数行から判ることは、ハイネが、書簡(1)、(2)にたいしてなんらかの返事をヴェールトに書いているということである。それは多分5月終りから6月の初めころである。

「先の2通の私の手紙にたいして、あなたが季節の変わり目を無事切り抜けられたとのご返事以上に慶ばしいものはございませんでした。どうぞ一層ご健康を回復されますように心から念じております。本当に、私は、春に向って命令いたします。あなたに春の歌と春の花の

全てをお送りせよ、もっとも暖な陽差しをお送りせよ！と。

当地では、この素晴らしい季節は、猫の死を悲しむ老婆のようにやってくるのです。おまけに商売が不景気なのでまるで世界がそっくり公売に出される運命にでもあるような様相をしめています。

ラインハルトが、私にあなたの諸用件に含めて書いてよこしましたことをカンベにたいへんよく判るように伝えました。あなたが最近、業をにやして草稿を燃やしてしまったらしいよと、とくに念入りに伝えたのです。かれは、そんな無茶なことはとても信じられないと云い張りながらも、これがかれをひじょうに不快にしたようでした。

さらに加えて、あなたがごくごく最近、大へん重大な申し入れをほかの筋からうけたらしいとかれに申しましたところ、かれはそれに対して、あなたはどこかの出版社と契約を締結する前に、優先権をかれに放棄させる契約上の履行義務があること、そして、その時にも他の出版社とどの程度まで競ることがかれに可能か、勿論知らなくてはならないと答えました。

あなたの全集の発行が遅滞していることと、かれの長い沈黙について、かれは、前者に関してはこれまでと同様、時期が悪いということのせいにし、後のことに関しては、長い間途絶えてしまった文通を再開するにしても、直接会うことをしないでするので心苦しいだとか、何か不愉快なことをうっかり手紙に書いて、あなたの病状を悪化させたくないだとか、かれの男の子を洗礼の時あなたにとりあげてもらうことが、当時、カンベの切望していた名誉であったのに、あなたがそれをしてくれなかったことで、かれはこれまで特別あなたに対して一種の不快感を持ってしまったとか、いろんな口実で弁解しています。

かれに伝達したことについて、私は声を出して笑わずにはいられませんでした。かれは事態をひじょうに深刻に受けとめたようです。そして本当にたいへん愛らしく、利発な子で、びっくりするほどこの老人に似ているこの少年は、あなたと新しい世代の仲介者になるはずであった、だからこの子があなたの名前をもらって、あなたに洗礼の名づけ親になってもらえたら、それをかれがどんなに慶ばしいことと考えていたか、などとかれは申しました。父親の心を傷つけないために私は、この点についてそれ以上は云いませんでした。しかし私はかれに、そのころあなたが、かれの息子のことをたいへん気にかけて私に問い合わせきて、かれにひじょうに旺盛な関心を寄せていたことを請合ってやりました。あなたが洗礼に立ちあわれなかったとすれば、それはまちががなく、もっぱらあなたの健康状態の故であって、だからといって、それがあなたに長い間手紙を出さないでいる理由には決してならないでしょう。

とどのつまりは、かれが7月の初めにあなたを訪ねると、再度神に誓って約束することで一件落着となりました。その際かれは、このことをあなたの妹さんには告げないようにと——実さいのところごたごたを一切避けるために私はそんなことはやらないでいますが——私に頼みました。

パリへのこの旅は、とうとう本当に実現することになりそうです。

最近カンベは、ある知人に手紙を書き、この大旅行に同行することを求めました。ビューローのハインリヒフォンクライストについての本をあなたに会って手渡したいという約束をとりつけました。しかし、カンベがまわりのひとびとに証言したところによると、この旅行のために『大きなスリッパ』を注文したという事実こそ、他のいかなることより重要

だと私には思われます。——」¹²⁾

この一種の脅しに近い、ラインハルトとヴェールトというハイネ親衛隊の策謀が、ようやく、俊巡して決断をのぼしにのぼしていたカンペを動かすことに成功したのであった。

カンペは約束どおり7月にパリにでかけ、ハイネに会って、「若干の例外はあるが、ここ3年ばかりの間に書きあげ」¹³⁾られた新しい詩集の原稿を見、「心を動かされ、新しい詩集の出版を引き受けた」¹⁴⁾のである。

「ロマンツェーロ」の作者自身の「あとがき」には、1951年9月30日の日付けがある。

そしてこのハイネの最大にして最後の詩集は、10月に世に出、「詩集としては前代未聞ともいえるほどの好評を受け、読書界に迎えられた。『ロマンツェーロ』は、反動的なプロシヤ政府やオーストリア官憲などの弾圧による発売禁止や没収にもかかわらずたちまち4版を重ね、短期間のうちにカンペ社は2万部以上を売りつくした」¹⁵⁾のであった。

書簡(4)、(5)、(6)の3通は、以上の産みの苦しみと、誕生のよろこびを共有した2人の詩人の心温まる友情の機智と諷刺に溢れた交流譜となっている。

以下にこの3通の書簡を、資料として「ロマンツェーロ」に関係ある部分を訳出して紹介しておきたい。

書簡(4)

あなたが今夜ハンブルクへ急行されて、あの書店の前に寸時でも歩を運ばれるようなことでもあれば、私はどんな振舞いに及ぶかわかりません。その店内にはいま丁度灯がともされ、まるでシャムから白い象が単身のりこんで来たかのように、色とりどりのひとびとでごったがえしています。

通りから、窓ぎわに並べられている書物の間から、あなたは部屋の真中まで見通すことができます。そして如才のない店員たちの輪の中に白髪の老人が見えます。かれは、年老いているとはいえ、眼はけいけいと輝いており、若々しく精力的に活動しています。その人は誰だろう、カンペのおやじそのひとです。そうです、カンペのおやじは、皆にあなたの「ロマンツェーロ」の校正刷りを読んで聴かせているのです。そしてアムステルダム通りのこの魔法使いは、集ったひとびと全員をかれの魔法でとりこにしているのです。

こんなことがもう2週間もつづいています。算数教科書を買いに、ひとりの少年が店に入って来ると、おまけとして、この白い象¹⁶⁾を受け取ることになり、ひとりの女性が、ドイツカトリック論難書を調べようとすると、たちまち、ムーワ人の王の最後のため息¹⁷⁾がかの女に朗読されることになり、さらには、大政治家たち、あるいはもっと偉大な文士たちが、時事問題について話しをしようとする、突然 Nonnenfürzen の歌が、すべての会話を終らせてしまいます。出たり入ったりしている子供や女や男たちは、耳をかたむけて聴き、聴いたことを外へ持ち出し、その内容が印刷されている紙が完全にかわく前に街のあちこちで、あなたの詩行ははやくも息づくのです。

他の詩人たちは年老いていますが、あなたは日ごとに若くなります。そうです、私は、いまはじめてあなたの病気のなぞがわかります。もう何年も前に死は、あなたを奪いとりとうとしたのですが、運命の瞬間がきたとき、あなたのあまりに若々しい活力にたじろいで、最後のとどめは宙に浮いたままになってしまい、あなたは生き残ることになったのです。

あなたの「あとがき」を丁度読み終えましたが、それはたいへん神秘的ではありますが、たいへん自然に思われます。まるで私はそれをどこかで、ブロッケン山や、ウェストミュンスター寺院や、アルハンブラの泉のほりなどで夢見たことがあるように思えるのです。

学者たちは、例によってこれで頭を悩ますことでしょうが、私は学者ではありませんので、私にとっ

てそれは、森のざわめきや、海の波濤のようによく解ります。

あなたが、博士とか教授としてではなく、人間として死のうと考えておられることは、当を得たことです。

勘定書の件では、あなたは私に借金はありませんことを申し上げます。ですが私の方は、私の愛と尊敬の最善の部分に関して、いつまでもあなたの債務者のままです¹⁸⁾。

ゲオルク ヴェールト

書簡(5)

きみはたしか、いつでしたかこんなことをおっしゃったことがあったのではないだろうか。われわれが、いつでも即座に間に合わせの儀礼的な手紙を書き、そんな手紙で、できるだけすみやかに用件を片づけてしまおうとするひとよりも、ぐづぐづして一通の返事がなかなか書けないひとたちのことの方が、よりしばしば想い起されるものだ。そこで、ヴェールト君、ぼくに下さったご親切なお手紙にたいして、とくにその最後の愉快なくだりにたいして、いまだに感謝の気持をお伝えしていないことを絶えず心苦しく思いながら、日毎にきみはぼくの心の中に深く根をおろしています。

ところでぼくは、決して来なかった健康な時間をつねに待っておりました。そして今日、遂にぼくは、こう決心しています。何故かはわかりません。というのも、ぼくはこれまで以上に、まさに今のこの瞬間、苦るしく、やりきれぬ気分です。この数週というもの、ぼくの病状はぐっと悪化しました。もはやいつものように気安めで病状の回復を希むことはできません。最悪の事態に備えて、すくなくとも頂いたお手紙へのご返事の借りだけはお返ししようと思っています。でも、ほかの借りも殊勝に返済しています。信心深い方たちが云うように、主がぼくを永遠の生命へとお召しになる時、ぼくはきっとそうなるでしょうが、ぼくのように世俗の尊敬を集めて死んだ詩人は皆無です。きみに「序文」がお気に召したとはうれしいことです。ぼくは、まさに証しをたてようとしたこと、即ち、宗教も哲学も必要とせず、この両者になんのかわりをもたない詩人としてぼくは死ぬ、ということの中で言明する余裕も気分も残念ながらありませんでした。詩人というものは、宗教の象徴的な云いまわしや、哲学の抽象的な理屈っぽいチンプンカンプンなことばをたいへんよく理解するものですが、宗教の旦那衆や哲学の旦那衆ときたら、詩人のことばなどまず解らないでしょう。詩人のことばは、マースマンにとってのラテン語同様で、かれらにとってはいつでもスペイン語のように思えることでしょう。この言語上の不認識によって、あれやこれやの旦那衆は、ぼくが信仰家の仲間入りをしたなどと思い違いをすることになったのでした。(中略)

ぼくは、きみが「ロマンツェーロ」と、さらにぼくの「ファウスト」を気に入ってくださればと希っています。ぼくはこれらの本に大きな価値は置いておりませんので、もしカンペがぼくをせきたてなければ、これらはこれほど早く陽の目を見ることはなかったでしょう。

ぼくはこの出版物を、まるで乙女が子供を、そうです2人の子供を手にするように手にしています。カンペは、ぼくがこのことをどう考えているかをきみにあれこれあげつらうかもしれません。ぼくは、ぼくの本の運命についてはまったく無知なのです。なぜならカンペは、自分の必要とするものを全て手に入れてからというもの、それについてはぼくに何ひとつ知らせないからです。この手紙が、ハンブルクできみの手に入り、ぼくにさらにお手紙をくだされば、きっとこのことについて何か聞き知ることになることでしょう。(後略)

ハインリヒ ハイネ

書簡(6)

病床からこんなに長文のお手紙をいただけるとは思ってもおりませんでした。お手紙を拝受いたした時には、肚をつぶさんばかりでした。そして私が、こんな長いお手紙を書かせる直接の動機を与え

たのではないかと、あれこれ考えこんだ次第です。私の思い当る限りでは、それにあてはまる節はなにもありませんので、あなたのお手紙は、あなたのたいへんな礼儀正しさの感動的な証しとうけとることにいたしました。

残念ながら、私はあなたのお手紙をうけとりましたのは、エルベ河畔ではありませんでした。

私はすでに5週間前にハンブルクを去りました。その頃カンペは、「ファウスト」と「ロマンツェーロ」の印刷にとりかかっておりました。そしてほかのことには目も耳も貸しませんでした。かれは政治的作家たちのさまざまな申し込みを拒絶しておりました。そしてあなたの作品を出版して世にひろめるのに、つまらぬトラブルを起して、それがさまたげられないよう、ドイツの諸政府をできるだけ挑撥しないことに心をくわいているようでした。この出版をかれは、熱心に、注意深く推進しておりますが、ひとりの商人が、自分の企てた仕事をこのように扱うのを見たことはめったにありません。別れる時かれは、印刷所から出てくる最初の見本を Hull 経由の蒸気船で私に送ってくれると約束しました。そしてきちんと約束を守りました。ですから今日、ヨークシャー伯爵領では、「白い象」や「2人のポーランド人」や「レヴィアタン」の話は、はやくもたいへん有名なものになっています。

そうです、あなたの2人の最も新しい子供が、突然われわれの前に現われたのは、あの大英帝国の日曜日の午後のことでした。まさしく偏屈と退屈とが、鼻と耳をつまんでおりました。街の裏通りは、異様に静かでした。あたり一面に祈禱書のおいがたちこめていました。窓を通して家々の中をのぞくと、クエーカー教徒やメソジスト教徒たちを、堅ぐるしく陰気に暖炉の火をにらみつけているかれらの子だくさんの女房たちや、おどろくほど健康な子供たちと一緒に見ることができました。丁度その時、長い間顔を見せなかった太陽がのぼって、黄色いチェスターチーズのようにぼんやりと11月の霧の中をめぐってました。わたしたちはたいへん衰しい気分になって気が狂いそうでした。その時、わたしたちはあなたの「ロマンツェーロ」をひらいて、午後いっぱい、夕方、そして夜中まで読みつづけたのでした。夜中にわたしたちは、ラビイと修道士ヨーゼの論争で終りとし、大いに笑い、たいへん愉快な気分になって別れたのでした。そこでこのような夜ふけの冒瀆のために、ブウブウ鼻を鳴らしながら、メソジスト教徒たちは、暖炉やベッドからとび出してしまったにちがひありません。

その時あなたの詩を朗読しあったひとびとは、もちろん文士たちでも、学者たちでも、大哲学者たちでもありませんでした。そうではなくて、商売のために世界のいたる処から集まってきた連中で、かれらにとっては、詩というものは何か日曜日の晴れ着のようなもので、ですから詩人が、かれらのために象や、レヴィアタンや、あの驚嘆すべき野獣を——かれらはその安否をいまや東奔西走してあらゆる国ぐにや海で尋ねまわることでしょうが——十全な簡明さで描けば、それだけ一層それらに感動させられる連中なのです。

あなたは、あなたの本の運命についてまったく見当もつかないとおっしゃっていますが——どうしてあなたに見当もつかないなどということがありえましょう！あなたの本は、それぞれ世界中で生きています。それ以上にあなたは何をお望みになるのですか？ミケランジェロはどこにでもいます。それとも、道学者どもや追剥ぎどものひとりひとりが、ドイツの新聞にあなたのことについて云うかもしれないことをいちいちカンペから聞いて、それをほんとうに気になさるのでしょうか？そんなことは私にはとうてい考えられません。これらの衰れた連中とて、やはり生きようとしているのです。もっと時がたてば、連中は抹殺されるでしょう。

完全な明快さが、あなたの全ての詩の魅力を作りだしています。単純率直なものは、やはり自然なものにもっとも近いのです。私が昨年、シュラネヴァダを馬で通り抜けた時、まるでカスケードというカスケードが、アットトルの中のをつづやいているのではないかと思えたものでした。そうなのです、あなたはレッキとした大風景画家であり、大肖像画家です。あなたは動物画家でさえあります。ランドゼールだってフレトレゴの犬をあれ以上うまく描くことはできなかったでしょう。(後略)

註

ヴェールトの書簡は、Bruno Kaiser (Hrsg.), „Georg Weerth Sämtliche Werke in fünf Bänden“, Bd. 5, Berlin 1957 をテキストとして用いた。(以下 SW と略記)

- 1) エンゲルス「ドイツ・プロレタリアートの最初で最も重要な詩人ゲオルク・ヴェールト」「マルクス・エンゲルス芸術・文学論」③大月書店、1975年、289ページ
- 2) エンゲルス「ドイツにおける共産主義の急速な進展」同上、225ページ。
- 3) 拙論「G. ヴェールトとH. ハイネ——両詩人の出会い——」, 「ハイネ研究」第5巻, 東洋館, 1983年所収参照。
- 4) ヴェールトは、1851年1月12日付、マドリードからの母宛の手紙の中で、1月4日土曜日にマドリードに着いたと報告している。そして2月17日にはすでにハンブルクへ帰り、マドリード以降の旅の様子を母宛に書き送っている。その書簡の中に、ヴェールトがハイネに会ったことが記されている。
- 3)参照。
- 5) 「ロマンツェーロ」のハイネ自身の「あとがき」, 「ハイネ全詩集」第4巻, 井上正蔵訳, 角川書店昭和48年1月, 465ページ。
- 6) 同上, 465ページ。
- 7) 同上, 495ページ。
- 8) 1849年4月11日付母宛の手紙にヴェールトはこう書いている。「ハンブルクのホフマン ウントカンベ社からぼくの『有名なる騎士シュナプハンスキーの生涯と所業』が出版されます」(SW, S. 303)
- 9) SW, S. 293
- 10) SW, S. 384
- 11) SW, S. 398~399
- 12) SW, S. 409~410
- 13) 5)と同じ, 464ページ。
- 14) 同上, 496ページ。
- 15) 同上, 495ページ。
- 16) 「ロマンツェーロ」第1巻の3番目の詩に「白い象」という題の詩がある。
- 17) 同上, 19番目の詩に「ムーワ人の王」という詩がある。
- 18) 「ロマンツェーロ」の「あとがき」でハイネは、読者にたいして「では、ご機嫌よう。もし私があるあなた方に何か借金があれば、勘定書を送ってくれたまえ」と書いている。これにひっかけてヴェールトが茶目気を出してこのように書いたのである。